

国

語

(
解答
番号

1

5

35

)

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に [1] ～ [13] の番号を付してある。

(配点 50)

[1] そもそも、ロボットはヒューマノイドであるべきかどうか、という問いは、われわれヒューマノイドロボット研究者に、常に投げかけられていると言っている。確かに、労働の代替としての性能を突き詰めると、人間としての形より、性能に特化した形のほうが有利である。たとえば、食器洗いをするだけの目的であれば、ヒューマノイドロボットによって、一枚一枚お皿を洗うよりも、大型の食洗器を使うほうが効率的である。人間のように複雑な構造をしていれば、当然壊れやすく、故障も多い。もともと典型的なのが身体の移動で、移動速度や、エネルギー効率を考えると、二足歩行よりは、車輪移動のほうがはるかに優れている。その意味で、人間っぽいロボットの必要性はない、と考えることもできるだろう。では、ヒューマノイドロボットを研究する必然性は何だろう。

[2] 人間が入れないような災害現場にロボットが入る場合、状況はあらかじめ想定できない。ロボットは未知の現場に行き、そこで作業をしなければならぬ。ある特定の作業に特化して設計されたロボットの場合、災害現場のような環境では、あらかじめ想定された作業がそのままできる場合はよいが、想定されない状況になったときに、それに適当に対応できるかどうかは、まったく予想できない。あらかじめ、状況をできるだけたくさん想定し、対応するハードウェアとプログラムをつくっておけばいいじゃないか、と考えるかもしれないが、あらかじめ想定できる状況は限られており、想定外のことは常に起こりうるということを考えれば、根本的な解決にはなりそうにない。ロボットを外部から遠隔操作することによって状況の変化に対処することも考えられるが、ロボットを操作するオペレーターが、あらかじめ作業に特化して設計されたようなロボットを、上手に使うことができるかどうかもわからない。

[3] 一方で、ロボットが人間らしい形をしていれば、ひよっとすると、オペレーターが実際にその現場に行った気分になって〔実際にバーチャルリアリティー(仮想現実感)の技術を使えば、それを実現することは可能である〕、自分がどのように対処す

るかというノウハウを、直接ロボットに投影することができるかもしれない。状況をあらかじめ想定する代わりに、オペレーターの適応能力に^(ア)マカせてしまおう、という考え方である。ロボットとオペレーターが同じ構造をしていれば、オペレーターは、あたかも自分の身体を使うように操作できることが期待される。たとえば、腕をどんな^(イ)カクドにして壁を押せば大きな力が出るか、あるいはできるだけ手先を早く動かすことができるかは、自分の経験から想像した結果を、ほぼ信用することができる。一方で、ロボットの身体構造がオペレーターと大きく違う場合には、たとえば、できるだけ大きな力を出したいと思っても、どのような姿勢をとればよいか直感的にわからず、うまく使いこなすには時間がかかるだろう。とくに、オペレーターがロボットについて、技術的にあまりくわしくない場合、どうやればうまく力を出すことができるかを、すぐに体得するのは難しい。ロボットが自律的に動く場合でも、災害現場がビルなどの人工物であった場合、その環境はもとも人間にとって使いやすいものであった可能性が高いため、人間の形をすることが有利に働く場合もあるだろう。

4 労働は、必ずしも物理的な仕事だけではない。人間そっくりの外観をした^(注2)アンドロイドが肩代わりする労働は、接客や対応である。人間の代わりに、人間に対するサービスを提供するのであるから、代替という意味で、ヒューマノイドロボットと定義することは自然である。しかし実際に、人間そっくりの^(ウ)ボウを持つアンドロイドをつくることは、本当に必要なだろうか。たとえば、モニターにアバター(仮想的なキャラクター)を映し出すほうが、コストは低しいし、変更などの使い勝手もよい。おそらく、そのときにもっとも問題となるのは、ロボット、あるいはアバターの、人間としての存在感ではないだろうか。しかし、人間としての存在感が、実体のどの部分にもっとも^(エ)ケンチヨに表れるかがわからないとすると、人間全体を複製してしまう、という方向で正解なのだろう。A ヒューマノイドとしての人間っぽさは、実は、未知の環境(ここでは、

災害現場やコミュニケーション相手の人)への適応性と強い関係があるのではないだろうか、と考えることができる。

5 外観が人間そっくりのアンドロイドには、このような接触や応対といった労働の代替という意味のほかに、非常に重要な役割がある。外見がとてもよく似ていても、アンドロイドは人間とは違う。では、その違いがどのくらいあれば、コミュニケーション相手の人間にとって違和感があり、どこまで同じであれば、違和感がないのだろうか。外見が同じならいいのだろうか。

か、それとも動きが重要なのだろうか。外見が酷似していると、かえってちよつとした違いから、大きな違和感を覚えるという心理的な効果は「不気味の谷」と呼ばれている。この谷の深さは、アンドロイドの外見や、運動をコントロールすることによって測ることができるかもしれない。このように、人間を調べるためのツールとしてヒューマノイドロボットを使うという考え方は、労働の代替とは違う、新しい考え方である。

6 人間に限らず、生物が、どうしてある行動を取るかのからくりを調べるために、その生物そっくりのロボットをつくり、その内部構造を考えることによって、生物の情報処理あるいは知能を知ろうという研究がある。このような研究を、生物の「構成論的研究」という。

7 スイス・チューリッヒ大学のロルフ・ファイファー教授とレディガー・ヴェナー教授がつくった **B** 砂漠アリのモデルロボット「サハロボット」は、その一例である。両教授は、砂漠に住むアリが自分の巣穴から出て餌を探し、まっすぐに巣穴に戻ることができる能力が、どのようにアリの内部にプログラムされているかを研究していた。このように、自分自身の場所を知り、目的の場所まで移動することを「ナビゲーション」と呼ぶが、砂漠でのナビゲーションは、木や草、石ころがある環境でのそれに比べて、目印が少ないという意味で、はるかに難しい。もし、アリの周りに、モク ^(オ) ヒヨウとなるものがあるならば、それらの場所を頼りに、自分の巣に帰ることができそうだが、砂漠の場合、周りに目立ったものがほとんどない。アリが、自分の通った道筋に目印になるフェロモン ^(注3) を残し、それをたどってナビゲーションする、ということも知られているが、砂漠アリの場合、フェロモンを地面に残そうとしても、砂が風に飛ばされて、あつというまにわからなくなる。

8 生物学者の研究によると、砂漠アリには、太陽の偏光 ^(注4) を感じるセンサーがあり、これをもとに巣穴に対する自分の位置を知ると言われている。砂漠の中では太陽光には事欠かないので、この仮説は正しいように思われるし、実際に偏光を観測することができるとセンサーがあることも観察されている。そこで、偏光を用いたアリのナビゲーションのメカニズムをくわしく知るために、両教授がつくったのが、砂漠アリの観測システムをまねたサハロボットである。

9 サハロボットには、車輪の回転量を測るセンサー、周りを見渡すことができる全方位センサーと、いくつかの偏光センサーが

取り付けられており、それぞれアリの持つているセンサーを模擬している。このロボットが、実際に砂漠で自分の位置を知り、目的の場所に移動する「プログラム」を実現するために、教授たちは、アリの脳内に見つかっている神経を模擬した、ニューラルネットワーク(神経回路)を使った。そして、いくつかの異なった偏光方向を持つ偏光センサーの値を、このネットワークに入力し、実際にロボットが、どの方向を向いているか知ることができるとを試した。

10 その結果、もともとアリで見つかっていたネットワークだけでは、どうやってもロボットの方向を完全に決めることができないということ、あるニューロン(注5)を加えることでそれが解決できるということがわかった。実際、後日のアリの解剖研究によつて、それまでは知られていなかったこのニューロンが、存在することがわかったのである。

11 人間の場合も、この砂漠アリの構成論的研究のように、ロボットをつくることによつて、人間の知能が、どのように実現されるかを知ることができる可能性がある。これが人間の構成論的研究であり、そのために使われるロボットは、人間の知能的な行動を再現することができるヒューマノイドである。人間のある機能を備えたヒューマノイドをつくり、それを人間と同じ環境に置いて、さまざまな振る舞いをつくり込む。つくり込む過程で、当初は考えていなかった、人間が持つ環境に関するある特徴を利用しないとその振る舞いが実現できないことがわかれば、ロボットをつくることを通して人間の振る舞いの原理を知ることになる。あるいは、人間と同じ環境内で学習するようなヒューマノイドロボットの場合、どのような学習過程を経るかを観察することによつて、人間の学習についての新しい知見が得られるかもしれない。行動をつくり込んだり、学習させたりした結果と、人間で観測されている事実を突き合わせて、人間の知能に関する新しい知見を得ることができる。

12 ここで、環境とはもちろん、コミュニケーションする相手も含んでいる。環境の一部に人間を含んでいるようなシステムの場合、ロボットにどのような外見をつくり込めば、ロボットを人間らしく感じるのだろうか。あるいは、どのくらい内部のプログラムをつくり込めば、それを見た人間が、ロボットを人間と錯覚してしまうのだろうか。このように、構成論的な研究に用いられるロボットは、これまでのロボットのように、人間の代わりに労働するだけでなく、人間を知るための道具として用いられることになる。

これまで開発されてきた産業用ロボットは、人間の使う道具の延長に過ぎず、制御される対象でしかなかった。設計者がロボットに役に立つ行動をプログラムし、あらかじめ理論でわかっていることを物理的に実現して、労働を代行する、その対象でしかなかった。しかし、構成論的研究のために用いられるヒューマノイドロボットは、人間を知るための科学的なツールとしての役割を果たす。その意味で、**C** 構成論的研究に用いられるロボットは、ロボットの新しい方向性であると考えられることができる。

(ほそだこう細田耕『柔らかヒューマノイド』による)

(注) 1 ヒューマノイド——人間の形をしたもの、あるいは人間の形をした、の意。

2 アンドロイド——人間の形をしたロボット。

3 フェロモン——動物の体内でつくられ、体外に放出されて同種の他の個体の行動や発育に影響を与える物質。

4 偏光——特定の方向にのみ振動している光。

5 ニューロン——神経細胞。神経系の構成単位。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア) マカせて
⑤ 海外にフニンする
④ ニンタイの限界に達する
③ 第一子をニンシンする
② 占いでニンソウを見る
① 資格をニンテイする

(イ) カクド
⑤ 教育制度をカイカクする
④ トウカクを現す
③ 農作物をシュウカクする
② カクギで政策を決定する
① 製品のキカクを統一する

(ウ) フウボウ
⑤ ムボウな計画を立てる
④ 将棋の王座をボウエイする
③ 都市の景観がヘンボウする
② 裁判をボウチヨウする
① 資源がケツボウする

(エ) ケンチヨ
⑤ 国民の期待をソウケンに担う
④ ケンギヨウ農家が増える
③ 鉄棒でケンスイをする
② 自己ケンジ欲が強い
① ケンキヨに反省する

(オ) モクヒヨウ
⑤ 道路ヒヨウシキを設置する
④ シヤツをヒヨウハクする
③ 転んだヒヨウシにけがをする
② サービスにテイヒヨウがある
① ジヒヨウを提出する

問2

傍線部A「ヒューマノイドとしての人間つばきは、実は、未知の環境（ここでは、災害現場やコミュニケーション相手の人）への適応性と強い関係があるのではないだろうか」とあるが、筆者がそのように考えるのはなぜか。その理由として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 災害現場において、特定の作業に特化したロボットでは想定外の出来事に対応できないが、人間と同じ構造にすればロボット自身が自律的に状況に適應できるはずだから。
- ② 人間とロボットの形が近ければ、あらゆる状況を想定したハードウェアとプログラムを準備できなくても、様子のわからない現場での対応をオペレーターに委ねることが可能だから。
- ③ ロボットの腕などの形がオペレーターと同じ構造になっていれば、オペレーターは未知の状況でも自分の身体を動かす経験に基づいて直感的に操作できることが期待できるから。
- ④ ロボットが自律して動く場合、現場が人工物であればその環境は人間に合わせて設計されている可能性が高いため、ヒューマノイドロボットが有利に行動できるであろうから。
- ⑤ 接客に携わるロボットには人間としての存在感を持つことが求められるが、それがどこに表れるのかわからないため、人間全体を複製すればどこかに存在感が示されると思われるから。

問3 傍線部B「砂漠アリのモデルロボット『サハボット』は、その一例である」とあるが、サハボットを用いた実験の成果について

の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7。

- ① サハボットの実験により、生物学者が想定していた以上にアリのナビゲーションシステムは独特だとわかり、アリにしか存在しないニューロンが関与していることが確認された。ロボットの研究がアリの知能の理解に貢献したといえる。
- ② サハボットの実験により、ロボットの電子的なネットワークだけではアリの行動を再現できず、生物学者の研究が示唆する偏光センサーが必要であるとわかった。アリについての生物学的研究がロボットの観測システムの高度化に貢献したといえる。
- ③ サハボットの実験により、ロボットの動きをアリにできるだけ近づけるためには、アリが脳内に持つニューロンの多様な機能を可能な限り分類することが必要だとわかった。ロボットの研究がアリの内部構造の理解に貢献したといえる。
- ④ サハボットの実験により、従来のロボットのナビゲーションシステムには欠陥があったが、アリの観測システムを模倣することでより精度の高いものへと改善できるとわかった。アリの生物学的研究がロボットの情報処理の高度化に貢献したといえる。
- ⑤ サハボットの実験により、アリの脳内にある既知の神経を模したネットワークではうまくロボットをナビゲーションできないとわかり、未知の細胞がアリから発見されることにつながった。ロボットの研究がアリの情報処理の理解に貢献したといえる。

問 4

傍線部 C「構成論的研究に用いられるロボットは、ロボットの新しい方向性であると考えることができるとあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① これまでのロボットは、プログラムどおりに行動するものでしかなかった。これに対し、構成論的研究に用いられるロボットは、対象の振る舞いを模倣するようにプログラムや外見をつくり込むことで、ロボットについての新しい知識を得るツールであるから。
- ② これまでのロボットは、人間の道具の延長となり、労働を代行するものでしかなかった。これに対し、構成論的研究に用いられるロボットは、模倣対象の動きや知能を再現し分析することによって、その対象についての新しい知見を得るツールであるから。
- ③ これまでのロボットは、人間に制御される対象としてのみ見られてきた。これに対し、構成論的研究に用いられるロボットは、ロボットが自律的に学習して動くプログラムを制作することによって、人間をサポートする新しい知性を開発するツールであるから。
- ④ これまでのロボットは、人間の労働を代替する存在としてのみ捉えられてきた。これに対し、構成論的研究に用いられるロボットは、人間と同じ環境にロボットを置き、人間とロボットが協働することによって両者の新しい関係性を研究するツールであるから。
- ⑤ これまでのロボットは、形状よりも効率を重視して開発されるだけであった。これに対し、構成論的研究に用いられるロボットは、対象の構造やメカニズムを検証することで、未知の環境にも柔軟に適応できるような新しい形状を探るツールであるから。

問5 次に示すのは、本文を読んだ後に、五人の生徒が話し合っている場面である。本文の趣旨と異なる発言を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9。

① 生徒A——筆者は、人間に似たヒューマノイドロボットを研究する必要性を問題にしていたね。ロボットの外見が人間に似てくると、ちょっとした違いから不気味に感じられることがあるというのはよくわかるし、そういう違和感とは、外見だけでなく、動きにもかかわっているよ。

② 生徒B——でも、人間そっくりではなくても、モニター上のアバターに人間らしさを感じることがあるよ。その理由はどこにあるのだろう。人間らしい動きが重要なのかな。ヒューマノイドロボットをつくるのは技術的に高度で、お金がかかるけど、モニターに映し出すアバターなら費用もかからないし、簡単につくり直すこともできるしね。

③ 生徒C——人間らしさということでは、外見や動きの問題だけではなく、知能の問題にも関わるよね。人間と同じ環境で、人間のように振る舞うヒューマノイドロボットをつくるとしたら、人間の知能的な行動を再現して試すことになるわけだから。

④ 生徒D——知能のことを考える場合、ロボットが人間とどれくらい自然にコミュニケーションできるようになるかがポイントになるよね。人間を相手にコミュニケーションを繰り返すことで、ロボットが人間の知能をよりよく模倣できるようにするんじゃないかな。

⑤ 生徒E——たしかに、コミュニケーションも含めて、実際の人間と同じような環境でロボットを行動させたり学習させたりすることに触れていたね。ロボットがどのような外見になれば不気味に見えなくなるかや、どのように振る舞えば人間に近づくかがわかるとすれば、それらもこれからのロボット研究が持つ可能性ということになりそうだね。

問 6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

① 1 段落の冒頭の「そもそも」は、後に続く問いについて、果たして真剣に考える意義があるのだろうか、と疑いを示すことで読者の気持ちを代弁している。

② 4 段落の第6文の「人間としての存在感ではないだろうか」は、「問題となるのは人間としての存在感ではない」という筆者の主張を控えめに主張している。

③ 8 段落の第2文の「正しいように思われる」は、第1文で紹介した仮説は正しいと判断しているが、断言することは留保した表現である。

④ 12 段落の第3文の「あるいは」は、ここでは前後の「のだろうか」で終わる二つの疑問について、どちらがより重要か読者に考えさせる働きがある。

(ii) この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① ヒューマノイドロボットの意義について、2、3 段落で例が紹介された後、4 段落でそれらとは大きく異なる観点が導入される。7 段落からは実験が紹介され、11 段落以降で1 段落の問題意識に対して批判を行いながら回答している。
- ② ヒューマノイドロボットの意義について、2、3、4 段落で例が紹介された後、5 段落でそれらとは大きく異なる観点が導入される。7 段落からは実験が紹介され、11 段落以降で1 段落の問題意識に対して批判を行いながら回答している。
- ③ ヒューマノイドロボットの意義について、2、3 段落で例が紹介された後、4 段落でそれらとは大きく異なる観点が導入される。7 段落からは実験が紹介され、11 段落以降で1 段落の問題意識に対して例を示しながら回答している。
- ④ ヒューマノイドロボットの意義について、2、3、4 段落で例が紹介された後、5 段落でそれらとは大きく異なる観点が導入される。7 段落からは実験が紹介され、11 段落以降で1 段落の問題意識に対して例を示しながら回答している。

第2問

次の文章は、稲葉真弓^{いなばまゆみ}「水の中のザクロ」(一九九九年発表の一節である。「私」は、東京都内にある二十四時間営業の入

浴・娯楽施設「ケンコウランド」に通っている。ある日、そこに客として寝泊まりし、常連客から「大阪のおばあちゃん」と呼ばれて親しまれている老女が、施設内ですつと使っているロッカーの前に座り込んで紙袋の中を探っているのを見かける。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。

(配点 50)

「何、捜しているの、おばあちゃん」声をかけてもうつぶいたままで、返事がなかった。捜しものは袋の中にあるのではなく、複雑に絡み合った記憶の糸の奥にあるようでもあった。紙袋の中につつまれた手はあてもなく、ただ、内側を掻きむしっているだけだ。それでもようやく顔を上げると、おばあちゃん言った。

5 「なくてもええようなもんなんやけど……どないしたんかいなあ、女学校るときから持ち歩いとった花のしおりなんやけど」
言いながら、おばあちゃんの顔には、自分でもそれが確かなのかどうか疑っているらしい、影のようなものが差している。

10 開きっぱなしのロッカーの中には、びっしりと物が詰まっていた。畳まれた白い下着は下の段に、パイプを渡した中段のハンガーには、折り畳んだ地味な色の着物を、四方洗濯バサミで留めて、皺^{しぼ}ひとつなくかけてあった。上の段には何が入っているのか、デパートの紙袋が押し込まれていた。ロッカーの扉の裏面は、まるでピンナップボード^(注1)だった。紐^{ひも}でつるしたノートのようなもの、小さなネジ類や突起物にひっかけた老眼鏡やハンカチ、葉を入れた袋もぶらさがっていた。マグネットで留めたメモもある。扉についている小さな鏡の下には、数本のヘアピンと、若い頃の自分の顔写真がセロハンテープで貼りつけてあった。合理的で無駄のない生活が、そのまま見える見事な内部だった。

「昔なあ」おばあちゃんは床に座り込んだまま、だれに言うでもなく言った。

「五つか六つの頃やったか、震災があつてな、東京は燃えてしもたけど、関西はどうということもなかったな、みんな東京の子供に送つたろういて、たくさん花のしおりを作つたもんやで。慰問袋や衣類の間にに入れてな、そうそう、布団を送る会とい

15 のもあつたという話や。そのしおりなんや。あんまりきれいやから、うちもお守りがほしい言うて、母親に手伝ってもらつて作つたんを、ずっとバッグの中に入れてなあ、持つとつたんやけど」

大正十二年の関東大震災の時に五つか六つということは、おばあちゃんは八十歳を過ぎていることになる。五つか六つの子供に花のしおりが作れるものかどうか、それを七十数年もの間持ち歩いてたという話にしても、首をかしげる気分はあつたが、おばあちゃんの記憶の混乱はいつものことだ。震災、震災と言うので、先ごろの阪神大震災のことかと思つて聞いていたら、じつは関東大震災の話が混在していて、それが突然、また阪神大震災の話につながっていくので、聞いているうちにわけがわからなくなつたと笑つていた女もいた。

ときに薄明かりが差すように、おばあちゃんの記憶は遠い過去に戻る。今と昔とが何の違和感もなく混じり合う瞬間もあるらしく、薄明かりは差し込んだり、ふいに消えたり、その運動の帰結はわからないまま、おばあちゃんの中を行き来していた。

25 A 脈絡も、つじつまの有無も頓着せずに話しているおばあちゃんを見るたびに、私の脳裏には決まつて母のことが浮かんでくる。母にもそういう瞬間が何度かあつたからだ。

晩年病んで、田舎に住むことを諦めた母は、上京してからほとんどの荷物を開かなかつた。記憶の混乱がわかつていたからか、見たくはないものがあつたからなのか、いつまでも積み上げたままだつた。私の住むマンションには、納戸めいた小部屋があつた。そこに荷物を入れて、当座必要なものだけを開けたのだが、開けて出したものすべてを小さな箱に仕分けをし、さらに段ボール紙で仕切りを作つて整理するという念の入れようだつた。ことに母が丹念に整理したのが、たくさん種類だつた。

30 自分で作つた箱の仕切りのひとつひとつに、まるでお雛様のように並べては、「これは高血圧の薬、こっちは風邪薬、これは催眠剤、この黄色いのは抗鬱剤、白いカプセルは胃腸薬」。便秘薬も利尿剤もあつた。しかも、何という名前の錠剤でどんな効用があるのか、細かいメモを添えてあつた。あれは、薬の名前と効用を記憶するためのものではなく、老いてからの病歴をそれとなく私に知らせるための行為だつたのかもしれない。年月の中で衰えていった器官の、順序の確認の作業のようでもあつた。

母は結局病院で、意識が混濁した状態で最期を迎えたが、死ぬときまで荷物の扱いは変わらなかつた。段ボール箱を開くこと

35 もなかったし、整理を促しても「開かなくても分かっているから」とそっけなかった。

田舎を離れたときの自分の気持ちだが、娘の部屋でぬるぬると出てくる、それに耐えられなかったのか、田舎をひきずるのがいやだったのか、それとも整理しきれないであろう時間の残りをそれとなく覚悟していたのか。

40 一緒に母と暮らすことを決めたのは、病んでからの田舎の日々が^(イ)のつぴきならないものになっていたからだった。一度転んでアキレス腱^{けん}をいたためから、身の回りのことがほとんどできなくなった。そのときすでに母は発病していたはずだが、私も縁者にも言わなかった。病気を知られたくないというよりも、口に出すのが恐^{こわ}かったのだろう。

部屋の中に放心したまま座りこみ、食事は昼と夜の二度、町の福祉課のサービスを頼っていた。ガスは危険なので、湯はポットで沸かす。家の中の行き来は台所とトイレだけ。人に体を触れられるのがいやだと言って、福祉サービスの人が入浴の支度に来ても、断わることが何度もあったという。

45 東京に来てからも母の日常は変わらなかった。体を動かすのがおつくだと、たいていキッチンの椅子に座り込みテレビを見るか、ベッドに横になつてうとうとと眠る。母が病んだのは脳だったが、それは急激なダメージを受けるものではなく、ひどく緩慢に、ほとんど目に見えない速度で細胞を破壊していた。

50 老いと病の中で、自分の体が破壊されていくのを待つだけの母でも、最後のあがきはあった。どこにそんな力が残っていたのか、二度、マンションの近辺で行方不明になった。足腰が不自由なうえろくに地理もわからないのに、ささいなきっかけで心が動き出し、ふらりと外に出てあとは混乱状態になる。一度目は、上京した翌年の夏のこと、マンションから歩いて十分ほどの民家の庭に入りこみ、朝顔の花をむしっているところを発見された。駆けつけたとき、母の手も顔も服も朝顔の汁でまだらに染まっていた。きれいだつたから、欲しくなつた。これで色水を作るのよと母は言った。

もう一度は入院する前に、これもマンションに近いマーケットの化粧品売り場で、陳列してある化粧品の蓋を手当り次第に開けているところを保護された。オイルや香水で濡れた手を無邪気に眺めながら、母は昔使っていた「ベルベット」というお白粉^{しろい}を探していたと言つた。ベルベット、いや、ドルフィン……ドルックスだつたかね。母の記憶はたえず変容する。思い出しかけて

言葉につまり、苦く寂しい顔になった。

ためこむことが安心を誘うところがあつたのだろう、昔から次々と生命保険に入り、郵便局や銀行や信用金庫に通帳を作り、株を買うのが好きだった。その株のことも、ついに晩年口にしなかったし、唯一の趣味といえる古裂(注4)や骨董(こつどう)についても忘れたふりをしていた。箱を開けば執着が生まれるという自戒が働いたのか、「もういいよ。みんなあんたにあげる」と言った。

東京に来てから、母はほとんど愚痴めいたことを言わなかったが、たつたひとつだけ、具合が悪くなつてから、田舎でよく見たという話をした。 **B** それはいつも同じ夢で、いつも同じ終わり方をするのであった。

60 だれかがじつと布団の傍らに座つて私を見ている。畳から少し浮いているときもある。だれだろうと思つてじつと覗き見るのだが、着物に見覚えがあつてもどうしても顔だけが見えない。妙なことに自分も一緒に浮いているようでもある。そのうちにはつと気付いて「あれは……」と人の名前を口にしかけると、決まつて目が覚める。けれどもその夢は少しも恐くはない。むしろ懐かしいような、温かいような、腹の底が膨らんでくる感覚で身がよじれそうになる。ああ見た、また見たと誰かに報告したいぬくもりの中で目が覚めてみると、妙にあとは白々としている。思いだしかけた名前もさっぱり思いだせない。

そんなふうに母は説明した。

65 慣れない場所と空間のせいだろう、母の気分は今日はこちらに、別の日には別のものにと **(ウ)** とりとめもなく動き続けた。私の部屋で使うさして高価ではないティーカップの、金とブルーの花模様を「ああ、きれいだ、こんなきれいなカップは見たことがない。田舎にはこういうものはないよ」としつこく誉めるので、「新しいのを買ってあげる。ブルーがいいの。それとも花柄？」と尋ねると、途端に興味をなくしたように首を振る。

70 自分の結婚式のときに作つた丸帯のことを執拗(しつと)に口にする日もあつた。「あれをあんたに仕立て直してみたらどうだろうね。いい帯になるよ」以前目にしたことのある記念の帯は、何か所か虫に食われ、仕立て直しも難しい状態になつていたはずだが、まだ大切に持ち歩いているのだらう。東京で仕事に明け暮れるうちに四十代になり、結婚する気もない一人娘に、母はまだ晴れ着を着せることを夢見ているらしかった。

75 何が母の意識を刺激するのか、その時になってみないとわからない。旅行雑誌、PR誌、雑貨類を集めた若い女性向けのムックなどを、年に何冊か定期的に引き受けている私のかたわらにきて、積み上げてある資料や写真、観光案内書などを手に取ることもあった。ここはどこ？ ここに行ったのかい？ 石の町だね。この町は今もあるのだろうか？ と話しかけたり、ひなびた

山間の村の写真を見つけたときは、突然ひきつれた声で泣き出した。村がダムの中に沈んだと知ったからだ、写真に写っている村の家々の屋根をいつまでも撫でながら、捨てたらいかん、捨てたらいかん。梁も屋根もダイコクさん（大黒柱のことを母はいつもそう呼んでいた）もオクドさん(注6)も、お井戸さんもみんなみんな、かわいそうになあ、とつぶやくのだ。

80 東京で娘と暮らすために人に預けた田舎の家が、幻の声となって母を呼んでいるのが見えるようだった。捨ててはいかんと泣く母は、自分もまた家を捨てたことを思いだし、身悶みもたえる。そんな母のかたわらで、私は食事を作り、眠る前の薬を飲ませ、入れ歯をブラシで洗ってやる。

85 石の町にもダムのある村にも私は行かなかった。岩山が崩れる音や、石切り場に響く鋭い金属音、あるいは藁葺屋根わらぶきにそよぐペンペン草やタンポポなどに心ひかれることがあっても、ついに東京を離れることができなかった。そうして六年が過ぎ、母は病院で死んだ。“大阪のおばあちゃん”を見ていると、母が田舎から東京に持ってきた、箱詰めはこ詰めの荷物のことを思う。C 開くこ

とがなかったのは、開かなくても見えていたからだ。あとは私の部屋で見聞きするものだけに、心の浮き沈みを託していた。石の町に庭の石を重ね、ダム底に沈んだという村に自分と家との年月を重ね、母は泣いた。恨みとか諦めとかではなかったような気がする。母が泣いたのは、捨てたものの中にまだ命が流れているのを知っていたからではなかっただろうか。田舎での一人暮らしを支えたものは、雑草だらけの庭であり、古びた家だった。庭で野菜を作り、蘭らんを育て、サツキを植え、冬になれば障子を張り替え、夏になれば井戸に必ず消毒剤を放りこみ、正月前には大黒柱を丹念に拭いた。

90 見知らぬ他人の中に身を沈めるには、いったいどれほどのものを捨てればいいのかだろう。幅二十センチのロッカーに収まるだけの記憶の量がいっただれほどの重みなのか、私には咄嗟とつさに想像できない。けれども、七十年以上も前の花のしおりと震災が、今もおばあちゃんの中に浮き沈みし、ロッカーを開けさせる。母がわずかな荷物に昔を託したように、幅二十センチのロッ

カーの中にも人には見えないものがぎっしりと詰まっているような気がする。

私はにこにここと笑いながら廊下を歩いていくおばあちゃんの、花柄ガウンの裾を見ている。D 肩に力を入れて背筋を立て、立ち止まり、意識的に歩こうとしている姿を目にすると、朝顔や化粧品に向かってやみくもに歩き出した母の晩年の歩行が、いやでも思い出された。

(注) 1 ピンナップボード——写真などをピンで留めて貼るための板。

2 慰問袋——被災者を見舞うために日用品や娯楽品を入れて送る袋。

3 阪神大震災——一九九五年の兵庫県南部地震によって引き起こされた阪神・淡路大震災。

4 古裂——古く中国などから入ってきた装飾的な布地。

5 ムック——雑誌と書籍の中間的な体裁の出版物。「私」は雑誌やこうした出版物の記事執筆や編集に関わる仕事をしている。

6 オクドさん——「くど」のこと。火をたいて煮たきをするための設備。かまど。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 ～ 14。

(ア) 首をかしげる気分

12

- ① 話の詳細がわからずとまどう気持ち
- ② その行為に共感しにくいという気持ち
- ③ 本当かどうか疑わしいと思う気持ち
- ④ 嘘に違いないと否定する気持ち
- ⑤ 自慢気な話を不快に感じる気持ち

(イ) のつびきならない

13

- ① 放っておくとどうにもならない
- ② どうしても避けることのできない
- ③ 煩わしく思えてならない
- ④ 本人の思うとおりにならない
- ⑤ 人並みの生活を維持できない

(ウ) とりとめもなく

14

- ① 昼も夜もとどまることなく
- ② 他人にはわからない理由で
- ③ 目的や方向性が定まらないまま
- ④ 自分の気持ちを抑えることなく
- ⑤ 平常心を失って見苦しく

問2

傍線部A「脈絡も、つじつまの有無も頓着せずに話しているおばあちゃん」とあるが、「私」には、この「大阪のおばあちゃん」がどのように見えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15

- ① ロッカーの中にぎつちりと物を詰め込んでおり、その一つ一つに関して、にせの記憶が混ざった筋道の怪しい物語を創作し、ケンコウランドで親しく交流する客たちに話して回っている。
- ② 現在の生活に必要な物はきちんと整理をして暮らしているものの、過去の体験を順序だてて記憶しているわけではない。他の客たちとの対話を手がかりとして、子ども時代の記憶をよみがえらせようと懸命に試みている。
- ③ 母親に手伝ってもらって花のしおりを作った少女時代の幸福な記憶を追想するために、一人で紙袋の中を捜していたが、「私」や他の客にもその美しさを見てほしくて、しおりの由来を無邪気に話している。
- ④ ときどき自分でも記憶の確かさに軽い疑いをもつようで、交流のあるケンコウランドの客たちを当惑させながらも、話の一貫性や整合性をあまり気にかけることなく、折々の心の動きをそのまま口に出している。
- ⑤ 関東大震災と阪神大震災の記憶が入り混じることは自分でも承知しているが、自分自身にとってはどちらも大切な記憶なのだと思い直して、恐れることなく自分の感じるままの物語を人々に話して聞かせている。

問3 傍線部B「それはいつも同じ夢で、いつも同じ終わり方をするのであった。」とあるが、この夢は母にとってどのようなものであったか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① 夢は母の記憶と想像の交錯を表し、母に記憶を整理する煩わしさを感じさせた。一方で孤独が慰められたことを母は誰かに訴えたいと思うが、目覚めるとそう思ったことが苦々しくなるようなものであった。
- ② 夢は母の過去と現在の断絶を表し、母に失われた記憶を確認する苦痛や幸福だった過去への執着を感じさせた。母は夢の内容を誰かに語りたと思うが、目覚めるとそう思ったことがばかしくなるようなものであった。
- ③ 夢は母の記憶の部分的な欠如を表し、母に記憶を取り戻せないもどかしさや懐旧の情を覚えさせた。母は繰り返し見る夢について誰かに話したいと思うが、目覚めるとそうした気持ちもさめてしまうようなものであった。
- ④ 夢は母の不安定な心理状態を表し、母に過去を思い出すことへの抵抗を感じさせた。また宙に浮くという不思議な体験を母は誰かに教えたいと思うが、目覚めるとそうした気持ちも興ざめしてしまうようなものであった。
- ⑤ 夢は母の記憶の日常的な混濁を表し、母に記憶が曖昧なことへの不安や望郷の念を覚えさせた。母は何度も同じ夢を見たことを誰かに知らせたいと思うが、目覚めるとそう思ったことも忘れてしまうようなものであった。

問4

傍線部C「開くことがなかったのは、開かなくても見えていたからだ。あとは私の部屋で見聞きするものだけに、心の浮き沈みを託していた。」とあるが、「私」は母の状況や心情をどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 母には、箱の中身よりも、それらにまつわる記憶が大事だった。東京の生活ではあえて箱の中を見ずに、日々見聞きするものによって、華やいだ気分になったり昔を思い出して動揺したりする。さらに、長い間一人暮らしを支えてくれた家も庭もまだ生きているのに、それらを捨てて東京に来たことにひどく心を痛めてもいた。
- ② 母は、箱の中を見なくても、自分の持ち物をすべて把握していた。箱を開けずに中身を想像することで、幸せだった昔に思い出をせたり記憶のつじつまを合わせようと苦労したりする。だが、娘の持ち物によって田舎の家や庭を思い出し、それらが自分の記憶の中で生きていることを確認して慰められてもいた。
- ③ 母は、荷物を見ると執着が生まれることを知っていたので、箱を開けなかった。東京に来てからは慣れ親しんだ家や庭の存在を忘れていたのに、娘の部屋でそれらを連想するものを見聞きして、温かい気持ちになったり田舎に帰りたくなったりする。同時に、病の悪化を理由に田舎から逃げ出したことを後ろめたく思ってもいた。
- ④ 母には、箱の中の物に関する思い出はなく、娘と過ごす時間や新しい記憶が必要だった。娘と暮らすうちに、身の回りの世話をしてくれる娘の優しさに触れて喜んだり、自分を病人扱いする何気ない娘の言動に傷ついたりする。一方で、長年ともに過ごした家や庭にも命があつて、それらが娘を選んだ自分を責めていると感じていた。
- ⑤ 母は、箱を開くと記憶が混乱することがわかっていたので、箱の中を見ようとしなかった。娘との生活でさまざまなものを見聞きし、自分の老いや病を認めざるをえず苦しんだり、娘の存在に安心したりする。また、田舎での一人暮らしを思い出して、住み慣れた家や庭が恋しくなつて、娘に説得されて東京に来たことを後悔していた。

問5

傍線部D「肩に力を入れて背筋を立て、立ち止まり、意識的に歩こうとしている姿を目にすると、朝顔や化粧品に向かつてやみくもに歩き出した母の晩年の歩行が、いやでも思い出された。」とある。「私」は「大阪のおばあちゃん」を見かけるたびに亡き母を想起させられているが、「私」には二人の姿がどのように感じられているのか。文章全体を踏まえて、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18

- ① 幅二十センチのロッカーの中には入っているはずもない遠い昔の花のしおりを捜している。大阪のおばあちゃんと、娘の家に持ち込んだ荷物を開けないことで田舎の家や骨董品を忘れないように努めていた母とは、記憶の混線をものともせず過去を現在に再生させる点で、重なり合っているように感じられている。
- ② 記憶の混乱によって周囲を驚かせる点で二人は重なり合うものの、思い出のすべてをロッカーの中に管理してこれ以上混乱しないように気を張って生きている。大阪のおばあちゃんと、老いや病のために田舎の家や昔懐かしいものへの欲望を抑えきれずに発作的な行動をとることがあった母とは、対照的な老年の姿だと感じられている。
- ③ ケンコウランドの不特定多数の客に愛されて元気に暮らす。大阪のおばあちゃんと、足腰が不自由なうえに脳を病んで田舎の夢を繰り返し見続けた母とは対照的であるが、花のしおりやティーカップ、山間の村の写真などの、過去の幸福な記憶につながるささやかで美しい物によって晩年の生活を楽しむ点で、二人は重なり合うと感じられている。
- ④ 記憶が混乱しているという周囲の噂を強気に振り払いながら縁者のいないケンコウランドで悠々と生きている。大阪のおばあちゃんと、身内である娘の家に移ってからも田舎の家や庭を捨てたことを後悔し続けて、田舎から持参した箱を開けないことで過去の記憶を守ろうとした母とは、同年代の女性でありながら対照的だと感じられている。
- ⑤ ケンコウランドで他人と交わって暮らす。大阪のおばあちゃんと、娘の家に引きこもった母とは対照的な晩年であるにもかかわらず、物が詰まったロッカーや開かれないままの段ボール箱に象徴されるような遠い過去の記憶が何かのはずみに浮かび上がり、ときに周囲をとまどわせる言動を見せる点で、二人が重なり合っている。

問6 この文章の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わな

い。解答番号は

19

 ・

20

 。

- ① 5行目「影のようなものが」、8行目「紐でつるしたノートのようなもの」、18行目「作れるものかどうか」の「もの」は、視覚でとらえられるものを指している。
- ② 32行目「あれは」の「あれ」は、生前の母がいくつもの葉を丁寧に整理し並べていたことを指す。「これ」や「それ」ではなく「あれ」を使うことで、「私」の記憶がかなり薄れ、ぼんやりとしか思い出せないことが表されている。
- ③ 36行目にある「ぬるぬると」という擬態語は、一般的には物の表面が粘液でおおわれて滑りやすい様子を表す。ここでは、田舎を離れたときの記憶が生々しく呼び覚まされていくことに対する不快な気持ちが表されている。
- ④ 40行目「恐かったのだろう」や56行目「あったのだろう」の「のだろう」は、事柄の事情や理由を推し量る表現である。どちらにも、直前の文で描写される母の言動の理由を推し量ったものになっている。
- ⑤ 82行目の「そんな」で始まる文では、「私」が母に対して行った動作について、「飲ませ」という使役の表現や「洗ってやる」という恩恵を施す意味の表現が使われている。これらの表現は、当時の「私」が母を煩わしく思い、冷淡で高圧的な態度で世話していたことを示している。
- ⑥ 90行目の「庭で野菜を作り」で始まる文では、「作り」「育て」など動詞の連用形がいくつも重ねられ、「拭いた」と結びれている。これは、母の日常生活の様子を具体的に示すことで、母の「田舎での一人暮らしを支えた」ものが「庭」と「家」であったことを強調したものである。

第3問

次の文章は『桃の園生』の一節である。謹慎中の弁(頭弁)「男君」は恋人の左京(女)に手紙を何通も送ったが、何者かのいたずらで、手紙は左京にほとんど届かず、弁に届けられた返信も多くは偽物であった。本文は弁の謹慎が解け、このいたずらを知らない二人が対面するところから始まる。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

頭弁は思しやる方(かた)あまたあれど、まづ左京が許(もと)に行きて(けしき)気色見(たま)給ふに、ありしに(注1)変はることなく、また人(注2)になれける中の衣ともなく、うらなければ、心(こ)おちゐて思ふものから、日頃(ふ)の文の心得(こころ)がたかりしも、絶え間も恨めしう思ひけるなめりとおぼえて、(ア)いとどらうたく、こまやかにうち語らひ(注3)給ふ。女は、「影踏(かげふみ)むばかりのほども、逢坂(あふさか)こそかたからめ、文(ぶん)をさへ通はし給はぬ(な)勿来(なごそ)の関(せき)の恨めしう」と、にくからぬさまにうちかすめ、(注4)怨(うら)じ聞(き)こゆるに、弁、「そは我(わが)こそ恨みをも聞(き)こえぬ。さしもおぼつかならず、日(か)ごとにもものしつるを、あさはかにも思(おも)ひなして、いつもあやしげにかこちなし給ひ、あひ思(おも)さざりつるが、かひなくのみ思(おも)ひしものを」と、まめだち給へば、女、「A いとまがまがしうも」とて、

Ⅰ 徒(いた)らに文(ぶん)も通(と)はぬ中(なか)檜垣(ひがき)隔(が)つる君(きみ)が心(こ)とぞ見(み)し

移(うつ)し心(こ)はげに、色(いろ)ことなりけり」と言(い)ふに、弁、「(イ)あやなくおぼめき給(たま)ひけりな。さらば賜(たま)ひつる文(ぶん)あまた所(ところ)狭(せ)げにてあるを、今(いま)見(み)せ奉(ほう)らん」とのたまふに、女もいぶかしう、「さらに知らず。僅(わずか)かに二度(ふたたび)三度(さんたび)ばかり」など言(い)ひて、弁の文(ぶん)取り出(い)でたり。こころ書き尽(つく)くし給(たま)ふは、ゆめなくて、三つばかりのみなり。いとあやしう、いかなることぞと胸(むね)うち騒(さわ)ぎて思(おも)ひめぐらすに、論(ろん)無(な)う使(つか)ひの心(こ)をさなく、もてたがへつるなめり、さても何方(いづかた)にかものせしと、いとどやすからずおぼれど、すべなければ、明日(あした)その主殿(しゅでん)司(つかさ)に問(と)ひてこそ、まことそらごとあきらめめとて、言(い)ひさしつ、**B**「我(わが)はつゆ忘(わす)れることもなかりしを」とうち泣(な)きて、

Ⅱ 君(きみ)を思(おも)ひ日(ひ)長(なが)くなりぬ夢(ゆめ)にだに見(み)ずて(注5)ここたも恋(こ)ひし渡(わた)れば

常(つね)忘(わす)れられず」などあはれなるさまに聞(き)こえなし給(たま)ふ。女、

Ⅲ 幾(いく)夜(よ)かも涙(なみだ)の床(とこ)をばらひ侘(わ)びしをれし衣(え)かへして(注6)ぞ寝(ね)し

月立つまでに」と言ふも、心苦しければ、「今はな思しそ。さらに途絶えあるまじう、目離れず見え **b** 奉らんところ思へ」と慰めて、男君、

〔IV さきくありてあひ見そめてし若草の妻はしきやし離れず通はん
その長浜に〕と聞こえ給ふ。
(注7)

またの日、ありつる文使ひの主殿司、密かなる所に呼びて問ひ **c** 給ふに、聞こえやらん方なくてゐたり。さすがに公達のし給ふことなどは、えも言ひやらず、この君のけはひもわづらはしう、まめやかに侘びあへり。弁、あらはにも言はねど、やうやう公達のしわざなりと心得給ひ、頭中將こそかかるをこの振る舞ひはせめ、異人は **(ウ)** 所置くやうもありなんと、推し当てに思ひ寄るに、妬きこと限りなし。やがて頭中將の方に、文書き給ふ。
(注10)

〔V 秋風の日に通ふ雁が音を君が使ひと我が思はなくに
いと世づかぬ御心なん珍しう〕とあり。頭中將いぶかしう見給ひけるが、やがて **C** 心得給ひ、侍従・少将などの、さかしらにせしことをほの知りて、我に思ひ寄りつるなめりと、をかしきものから、わづらはしうて、

〔VI おぼつかな夕霧わたるみそらには通はん雁の声も絶えつる
いとあやしう、さらにいかなることとも思ひ給へ寄られ **d** 侍らずなん〕と聞こえ給ふ。

(注)

- 1 また人——他の人。
- 2 中の衣——ここでは、打ち解けない心の意。
- 3 影踏むばかりのほど、逢坂こそかたからめ、文をさへ通はし給はぬ勿来の関の恨めしう——訪れることは難しいだろうが、手紙すらくださらないのは恨めしくの意。
- 4 うちかすめ——それとなく言い。
- 5 ここども——たくさん。
- 6 衣かへしてぞ寝し——衣を裏返しにして寝ると恋人の夢が見られるという俗信を踏まえた表現。
- 7 さきくありて——幸せなことに。
- 8 はしきやし——いとおいしいなあ。
- 9 その長浜に——ここでは、これからずっとの意。
- 10 雁が音——ここでは、手紙を指す。
- 11 さかしらに——ここでは、悪ふざけでの意。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

23

(ア) いとどらうたく

21

- ⑤ ますます本心を知りたくて
- ④ いっそういとおしく
- ③ ひどく不安で
- ② たいそう申し訳なく
- ① とても安心して

(イ) あやなくおぼめき給ひけりな

22

- ⑤ 苦し紛れにいいわけなさったよ
- ④ ふがいないと思わないでくださいよ
- ③ あやうく信じそうになりましたよ
- ② 理不尽にもとほけなさったよ
- ① 無礼にも私のせいになさったよ

(ウ) 所置くやうもありなん

23

- ⑤ 場所がらをわきまえた判断もあつてほしい
- ④ もっと気をつかう余裕もあつてほしい
- ③ きつと遠慮することもあるだろう
- ② 適切な行動をする配慮もあつただろう
- ① 気詰まりなところもあるに違いない

問2 波線部 a、d の敬語は、それぞれ誰に対する敬意を示しているか。その組合せとして正しいものを、次の ①～⑤ のう

ちから一つ選べ。解答番号は 24。

- | | | | | |
|----|-----|-----|----|-----|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| a | a | a | a | a |
| 左京 | 左京 | 弁 | 弁 | 弁 |
| | | | | |
| b | b | b | b | b |
| 弁 | 弁 | 弁 | 左京 | 左京 |
| | | | | |
| c | c | c | c | c |
| 左京 | 主殿司 | 弁 | 弁 | 主殿司 |
| | | | | |
| d | d | d | d | d |
| 弁 | 頭中将 | 頭中将 | 弁 | 弁 |

問3 傍線部A「いとまがまがしうも」とあるが、このときの左京の心情についての説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 弁の方こそ心が離れているのにそのことを認めず、逆に私を責める恨み言まで言うのをにくらしいと思っている。
- ② 私のことなどもう気にかけていないはずなのに、弁が口先だけで愛情を訴えてくることを気味が悪いと思っている。
- ③ 手紙が来ないので弁への思いは断ち切っていたのに、今になって言い寄ってきたことをわずらわしいと思っている。
- ④ 私がこれほど弁を愛しているのに、謹慎明けの弁が遠慮から本心を明かさないのでかしいと思っている。
- ⑤ 会えなかった間のつらさを訴えているのに、弁がまったく聞く耳を持ってくれないのを悲しいと思っている。

問4 傍線部B「うち泣きて」とあるが、このときの弁の心中はどのようなものであったか。その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 左京との間に生じていた誤解はすべて手紙の行き違いによるものであったと判明したことで、安心している。
- ② 以前よりも愛情が薄れたことを左京に見抜かれそうになり、動揺を隠しながらうまいいいわけを考えている。
- ③ 主殿司に尋ねても手紙が紛失した原因はわからないだろうと思い、真相を明らかにすることを断念している。
- ④ 手紙が届かなかった理由は知りたいが、それよりも左京に愛情を伝えたいという思いの方が強くなっている。
- ⑤ 左京の心がすでに離れてしまったことを知って傷つき、なんとか愛情を取り戻そうと必死になっている。

問5 傍線部C「心得給ひ」とあるが、頭中将は何を心得たのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから

一つ選べ。解答番号は 27。

- ① 頭中将が手紙に関するいたずらの首謀者であると、侍従や少将が弁に白状したということ。
- ② 頭中将が左京と深い仲だということを、侍従や少将が弁に教えてしまったということ。
- ③ 侍従や少将からいたずらが過ぎると思われる頭中将に、弁が同情しているということ。
- ④ 手紙に関するいたずらの真相を頭中将に解明してほしいと、弁が期待しているということ。
- ⑤ 手紙に関するいたずらは頭中将のしわざであると、弁が思い込んでいるということ。

問6

28

I～VIの和歌のやりとりに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

- ① Iで手紙が来ないのはあなたの心が離れたからなのではないかと左京が弁を非難したのに対し、IIで弁は手紙が届いていないとは夢にも思っていないかつたと言明した。
- ② Iで左京が弁に心変わりを伝えたのに対し、IIで弁はあなたのことをこれからも愛し続けると訴えたが、IIIで左京はこれ以上悲しい思いをさせられるのはつらいと拒絶した。
- ③ IIで弁は会えない間に左京の愛情が薄れたのではないかと疑ったが、IIIで左京はせめて夢の中だけでも会いたいと願っていたのにと反論したため、IVで弁は愛情を伝えて慰めた。
- ④ IIIであなたが恋しくて幾夜も泣いて過ごしたと左京が弁に思いを伝えたのに対し、IVで弁はあなたのもとにずっと通い続けると訴えて左京を安心させようとした。
- ⑤ Vで左京のもとに手紙が届かなかった理由を知らないかと弁が頭中将に尋ねたのに対し、VIで頭中将は自分も気になっはいるが全く心当たりがないと返事をした。

第4問

次の文章は清の章学誠（しやがくせい）が読書について述べたものである。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 50）

読ム其書者、天下比（注1）比矣。知ル其言者、千不レ得レ百焉。知ル其言

者、天下寥（注2）寥矣。知ル其所（注3）以（注4）為言者、百不レ得レ一焉。然（注5）而天下

皆曰、我（注6）□讀其書、知其所以為言矣。此知ル之難（注7）也。

人知ル『易』為（注8）卜筮之書矣。夫子讀（注9）之、而知ル作者有（注10）憂患、是

聖人之知（注11）聖人也。人知（注12）離騷為（注13）詞賦之祖矣。司馬遷（注14）讀之、

而悲（注15）其志、是賢人之知（注16）賢人也。夫不（注17）具（注18）司馬遷之志、而欲

知（注19）屈原之志、不（注20）具（注21）夫子之憂、而欲（注22）知（注23）文王之憂、則幾（注24）乎罔

矣。

然則古之人、有（注25）其憂、与（注26）其志、不幸不（注27）得（注28）後之人、有（注29）能憂（注30）

其^シ憂^{ヒラ}志^{トスル}乙^シ其^シ志^ヲ而^テ因^{リテ}以^テ湮^{イン}没^{ボツ}不^レ彰^{カナラ}者^ハ蓋^シ不^レ少^{ナカラ}矣[。]

(章学誠『文史通義』による)

(注) 1 比比——いたるところに存在するさま。

2 『易』——『易経』のこと。儒家の経典である五経の一つ。

3 卜筮——占い。

4 夫子——孔子を指す。

5 「離騷」——屈原が讒言^{ざんげん}にあい、追放されて作ったとされる韻文の文学作品。

6 詞賦——韻文の一形式。

7 司馬遷——前漢の歴史家。『史記』を著し、その中で屈原の伝記を書いた。

8 屈原——戦国時代の政治家。憂国の詩人としても知られる。

9 文王——周王朝の基礎を築いた人物。かつて殷^{いん}の紂王^{ちゆう}に幽閉され、その苦境の中で『易経』の制作に関わったとされる。

10 湮没——埋没する。

問 1 波線部(1)「祖」・(2)「幾」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選

べ。解答番号は 29 ・ 30。

(1)

29 「祖」

⑤ ④ ③ ② ①
 後 流 起 遺 傑
 継 派 源 物 作

(2)

30 「幾」

⑤ ④ ③ ② ①
 近 願 危 兆 尽
 い う い す きる

問2 傍線部A「読_レ其書者、天下比比矣。知_レ其言者、千不得_レ百焉。知_レ其言者、天下寥寥矣。知_レ其所以_レ言者、百不得_レ一焉」の表現や構成に関する説明として適当でないものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

31。

- ① 同じ字を重ねた「寥寥」という語は、「比比」と対応しており、数量が少ないことを形容している。
- ② 「百不得_レ一焉」という表現は、「千不得_レ百焉」を受けて、そのような人がほとんどいないことを示している。
- ③ 「知_レ其言者」についての記述を繰り返すことによって、「知_レ其言」が最も重要であると強調している。
- ④ 「千不得_レ百焉」までとそれ以下とが、対句的に構成されている。
- ⑤ 「読_レ其書」「知_レ其言」「知_レ其所以_レ為_レ言」という三つの段階を設けて分析している。

問3 傍線部B「我□□読其書、知其所以為言矣」について、(a)空欄に入る語と、(b)書き下し文との組合せとして最も適

当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① (a) 何—— (b) 我何ぞ其の書を読み、其の言を為す所以を知らんやと
- ② (a) 雖—— (b) 我其の書を読むと雖も、其の言を為す所以を知ると
- ③ (a) 猶—— (b) 我猶ほ其の書を読み、其の言を為す所以を知ることがごとしと
- ④ (a) 能—— (b) 我能く其の書を読み、其の言を為す所以を知ると
- ⑤ (a) 未—— (b) 我未だ其の書を読み、其の言を為す所以を知らずと

問 4 二重傍線部(ア)「聖人」・(イ)「聖人」・(ウ)「賢人」・(エ)「賢人」が指すものはそれぞれ誰か。その組合せとして最も適当なものを、

次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| ④ | ③ | ② | ① |
| (ア) 文王 | (ア) 夫子 | (ア) 文王 | (ア) 夫子 |
| (イ) 夫子 | (イ) 文王 | (イ) 夫子 | (イ) 文王 |
| (ウ) 司馬遷 | (ウ) 屈原 | (ウ) 屈原 | (ウ) 司馬遷 |
| (エ) 屈原 | (エ) 司馬遷 | (エ) 司馬遷 | (エ) 屈原 |

問5 傍線部C「湮没不彰者、蓋不尠矣」とあるが、筆者がそのように述べる理由の説明として最も適当なものを、次の

① ～ ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

34。

- ① 時代が下ると、古人の憂いや志を理解しようとする人が少なくなるのは当然であるため。
- ② 自分の中に古人に通じる憂いや志を持たなければ、古人に共感することはできないため。
- ③ 後世の人は聖人や賢人を敬わないので、その憂いや志を知ることが難しいため。
- ④ 古人の憂いや志に共感できる人が後世に現れるかどうかは、すべて偶然に左右されるため。
- ⑤ 尋常ではない不幸な思いを味わわない限り、古人の憂いや志を知ることができないため。

問6

本文の内容と最もよく合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① 作品を理解するには、作者と同じ資質をそなえる必要があるが、聖人や賢人の著作を読むに当たってはそれが困難であるので、できるだけ多くの経験を積み、読解の助けとする努力を惜しむべきではない。
- ② 読書は、聖人や賢人の著作を対象とすべきであるが、単に内容を理解するだけではなく、作品に共感し感動を得ることが重要であり、そのためには前提となる知識を多く身に付けることが必要となる。
- ③ すでに評価の定まった聖人や賢人の著作の他にも優れた韻文の文学作品は多くあるので、埋もれた作品を発掘してその価値を見出していくことにこそ読書の意義がある。
- ④ 書かれた内容の理解や知識の獲得だけを目的として読書をするのではなく、聖人や賢人にならって、作品が生み出された動機など表面には現れていない部分まで理解することが大切である。
- ⑤ 多くの本を読んでその数を誇る人が多いが、読書は質の高いものを読んでこそ意味があるので、聖人や賢人によって価値を認められた作品を選んで読むことを心がけなければならない。